

国内経済情勢

概 観

輸出の増勢持続に加えて、住宅投資、個人消費なども幾分持直しているため、最終需要全体としても緩やかな回復傾向にある。これを映じて出荷はかなりの増加となり、製品在庫の調整が進捗した。

この間商品市況は堅調な地合いが続き、卸売物価も市況商品中心に4か月連続してかなりの上昇となったが、消費者物価は小幅上昇にとどまった。

金融面では、銀行券の伸びは持直し気味であり、マネーサプライは徐々に伸び率を高めつつある一方、企業の資金需要は鎮静傾向が強まっている。

2月の国際収支は、輸出の好調から貿易収支が大幅の黒字となり、長期資本収支も多額の流入超過をみたため、総合収支はかなりの黒字となった。

出荷は大幅な増加

2月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は前月比+2.0%と前月(同+2.0%)に引続きかなりの増加となった(前年同月比+12.2%)。これは、自動車(主としてトラック)が反動減をみたものの、不況カルテル期限切れのセメントが大幅の増加となったほか、石油、鉄鋼、機械、電気機械などが増加したためである。

鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は前月減少(前月比-1.4%)のあと前月比+5.2%と大幅な増加をみた(前年同月比+12.0%)。財別にみると、非耐久消費財が灯油の減少などから小幅増にとどまったほかは、耐久消費財が輸出好調(家電製品、乗用車等)もあって著増したのをはじめ建設資材(条鋼類、セメント等)、一般資本財がいずれも大幅に増加し、生産財も輸出向け鋼材等を中心に増加した。

この間生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、設備補修を控えた石油製品、輸出船積み待ちの鉄鋼などが増加したものの、資本財(土木建設機械等)、耐久消費財(家電製品等)が大幅に減少したことなどから、前月比-1.3%と減少を続けた。この結果生産者製品在庫率(45年=100)は132.3と大幅な低下を示した(前月140.9)。

2月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、圧延機械等大型受注機械の引渡しのほか、土木建設機械、コンプレッサー等公共事業関連とみられる機種の増勢が目立ち、前月比+6.8%と増加を続けた。

機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)も化学、鉄鋼などの増加から前月比+20.8%と、なお前年水準を下回る(前年同月比-10.4%)ものの、引続きかなりの増加となり、一方建設工事受注額(民間産業分、季節調整済み、速報)は、前月比+22.3%と3か月ぶりの大幅増加となった(前年同月比-5.7%)。

1月の新設住宅着工戸数(季節調整済み)は、住

宅金融公庫融資の進捗から前月比 +5.4% と前月著増のあと引続き増加した。

2月の全国百貨店売上高(季節調整済み、速報)は、前月比 +3.2% と2か月連続してかなりの伸びをみた。これにはうるう年の影響もあるものの、基調的にも衣料品などを中心にこのところ持直し傾向にあるとみられる。3月の乗用車新車登録台数(季節調整済み)は、春需期を迎えてメーカーの拡販努力もあり、前月比 +18.3% と増加を続けた。

2月の労働関係指標の動きをみると、有効求人倍率(季節調整済み)は、建設、繊維、電気機械等からの求人が増加している反面求職が減少したため、0.62倍と前月に引続き持直し、常用雇用(同)も約2年ぶりに微増となった。また名目賃金は時間外手当等の増加から前年比 +13.9% と引続き伸び率を高め、実質賃金も同 +4.2% となった。

商品市況は堅調続く

3月の商品市況は、綿糸、石油製品が反落したものの、銅、鋼板が急伸したほか、条鋼類、セメント、合成樹脂、鉛などが値上りするなど、総じて昨年末以来の堅調地合いを持続した。これは、一部に減産緩和の動きもみられはじめたものの、企業の生産態度が大勢としては引続き慎重である一方、需要面では輸出の増勢に加えて国内実需の持直しや需要筋の在庫補てんなどの動きがみられるためであるが、このほか海外相場の堅調なども影響している。

3月の卸売物価も、鉄鋼、非鉄、木材など市況商品の上伸を中心に前月比 +0.6% と引続きかなりの上昇となった(前年同月比 +4.5%)。

一方3月の消費者物価(東京)は、衣料品が値上りしたものの、野菜等の季節商品が反落したため前月比 +0.4% と小幅の上昇にとどまり、前年同

月比上昇率は +9.8% と3か月ぶりに一けた台となった(なお季節商品を除く総合では前月比 +0.7%)。

銀行券の伸びは持直し気味

3月の金融市場をみると、銀行券は2,155億円の発行超(前年同2,324億円)となったが、財政資金は年度末を控えて公共事業関係費を中心に支払が進捗したため、国債発行額が引続きかなり多額に上ったものの、総収支じりでは8,730億円の払超となり前年の払超額(同5,238億円)をかなり上回った。この結果、その他勘定を合わせて月中5,557億円の資金余剰(前年同2,035億円)となったが、その半ばは準備預金の積増しに振向けられ、残余の余剰額に対し日本銀行は貸出の回収および手形の売却によって調整した。

この間、コール・手形売買市場では、財政資金の支払が月末数日に集中したこともあって、需給は月中さほどの引緩み感なく推移し、コール・レート、手形売買レートとも変らなかったが、季節的な資金需給緩和期入りを映じ更月後の4月1日にはコール・レートは0.25%、手形売買レートは0.5%それぞれ低下した(低下後のコール無条件もの出し手レート6.75%、手形買い手レート7.25%)。

3月の銀行券平均発行高は、前年同月比 +10.4% (前月同 +11.1%) となったが、更年後の動きをならしてみると、伸び率は幾分持直し気味にうかがわれる(四半期平残の季節調整後前期比は昨年10~12月まで3期連続 +2.2% のあと1~3月は +3.6% に上昇)。2月の広義マネーサプライ(M₂、平残)は準通貨(定期性預金)の伸びが高水準を続けているうえ、企業流動性水準の回復を映じた預金通貨の増勢もあって、前年同月比 +15.3% と引

続き伸び率をやや高めた。

2月の全国銀行貸出は、月末休日の影響もあって月中7,686億円増と前年(同4,523億円増)を大幅に上回る増加となり、月末残高の前年比伸び率も+11.9%と前月(+11.5%)を上回った。

この間企業の資金需要をみると、耐久消費財関連企業の増加運転資金や流通関連の設備資金などがみられはじめているものの一部にとどまり、一方滞貨、売上減などに伴う需資は在庫調整の進捗、販売価格の上昇などから工作機械、海運等を除けばおおむね一巡した模様で鎮静傾向が強まっている。企業の手許流動性も収益の回復傾向や財政支出、輸出代金の流入などから引続き高まりつつあり、余裕含みのところもみられる。

2月の全国銀行貸出約定平均金利は月中0.051%の低下となり、この結果昨年4月以降の公定歩合引下げに対する通算追随率は42.3%、このうち短期金利のみではほぼ前回緩和期の最終追随率なみの71.0%に達した。

3月の公社債市況は、農林系統金融機関、信用金庫等の買い方が総じて積極味に乏しく、相場は通月おおむね保合い圏内の小動きで推移した。

一方株式市況は、総じて見送り気分が強く、旧ダウ4,600円前後のもみ合い商状に終始し、結局月末4,596円(前月末4,624円)で越月した。

貿易収支は大幅黒字

2月の国際収支は、輸出の好調から貿易収支が大幅の黒字を計上し、また長期資本収支も対日証

券投資の流入や外債発行の高水準などから多額の流入超過となったため、総合収支は619百万ドルの黒字となった。

2月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、前月比+2.9%と3か月連続の好伸となった。品目別にみると、繊維、化学製品はやや減少したが、テレビなど家電製品の数量増が引続き目立つほか、鉄鋼も中国向けの船積みなどからかなりの伸びを示し、また船舶も前月の反動増となった。地域別には、米国、西欧向けが高水準にあるほか、共産圏向けも前月に続いてかなりの増加となった。

他方2月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月比-2.7%と2か月連続の減少となった。これは原油の入着は増加したものの、非鉄鉱石、原料炭、木材、原綿などの入着数量がかなり減少したためである。もっとも輸入価格は木材、非鉄など総じて上昇傾向を続けている。

3月のインターバンク米ドル直物中心相場は、輸出の増加、海外の円需要などによる市場需給の緩和傾向を映じて軟化商状を続け、中旬末に300円の大台を割込んだあと、月末相場は299円70銭(前月末302円25銭)となった(更月後4月8日には298円00銭)。

3月の外貨準備高は月中231百万ドル増加し、月末残高は14,182百万ドルとなった。

(昭和51年4月9日)